

令和 7 年度 福島大学基金研究推進事業助成による成果報告書

令和 7 年 11 月 25 日

学 長 殿

所属部局・職名

(所属・学年) 共生システム理工学研究科・修士 1 年

申 請 者 名

(学会発表助成の場合は参加者名)

三浦慎哉

<p>助成の区分 (該当するものに○)</p>	<p>○学会発表助成・学術出版助成・学術論文発表助成</p>
<p>研究活動名</p>	<p>令和 7 年度日本水産学会東北支部大会</p>
<p>成 果 の 概 要</p>	<p>令和 7 年 10 月 25・26 日にいわき市労働福祉会館で開催された令和 7 年度日本水産学会東北支部大会において、「原発近傍のダム貯水池に生息するワカサギの 137Cs 濃度変動」というタイトルで口頭発表を行った。発表者は、三浦慎哉・遠藤豊明・金指努 (福島大)、猪俣絢女・島村信也 (福島内水試)、石井弓美子・林誠二 (F・REI)、和田敏裕 (福島大) であった。発表では、水位変化や台風通過に伴う湖水の 137Cs 濃度変動が、プランクトンを介してワカサギの 137Cs 濃度変動に影響していたことを示した。聴講者は約 30~40 名で、ワカサギの食性やプランクトンの懸濁物質の取り込み機構などについて質問が寄せられた。</p> <p>一日目はミニシンポジウムに参加し、東北 6 県における東日本大震災当時の被害状況や復興の進展、海洋環境変化に伴う水産課題についての発表を聴講した。特に、海水温上昇によるサケやハタハタの漁獲量減少、ホタテガイのへい死増加など、主要水産物への影響が大きい一方、増加傾向にある暖海性魚種が十分に活用されていない現状が指摘された。</p> <p>二日目の一般研究発表では、東北大学、岩手大学、福島大学の大学院生に加え、水産研究・教育機構や宮城県水産技術総合センターなどからも発表があり、藻場保全、海藻の遺伝解析、魚類の放射性セシウム動態、養殖技術の改良、海洋環境変動の影響評価など、多岐にわたる水産研究成果が報告された。</p>